

「ポスターセッション」

関連職種連携教育における ICF の活用に関する一考察

国際医療福祉大学医療福祉学部 専任講師
博士前期課程 2008 年卒
山口佳子

1. はじめに

現在、医療保健福祉の現場では、利用者・患者の多様なニーズに対応するために、関係する専門職の密な連携と協働によるチームアプローチが必須となっている。ここで必要となるのが共通言語である。2001年にWHOにより定義された国際生活機能分類（ICF）のねらいの1つに、共通言語として活用することにより、本人、家族、各専門職が共通理解を持つことがあげられている。現在、医療保健福祉の各分野における支援内容および共通理解においてICFが活用されている。臨床現場での医療保健福祉の連携に対応すべく、専門職の養成課程において関連職種連携教育（IPE：Interprofessional Education）が数か所の養成校で行われている。筆者所属の大学では、各職種への理解、協働における共通言語としてICFが使用されている。

本稿では、文献より医療保健・福祉・教育など各分野におけるICFの活用状況を示し、また専門職の養成課程におけるIPEにおけるICFの活用について、例として筆者所属大学のIPEの教育内容を示し、ICFの活用状況と学生の理解度について分析し、社会福祉士養成の立場からIPEにおけるICFの活用について考察する。

2. 各分野におけるICFの活用状況

医療分野では、一般的に幅広く利用可能なICFのコア・セットが特定の疾患のために開発され、

現在までに16セット発表されている。リハビリテーション分野では、「リハビリテーション総合実施計画書」「リハビリテーション実施計画書」に取り入れられ、診療報酬の算定要件となっている。厚生労働省は2007年に「活動と参加の基準（暫定案）」で評価基準を具体的に示し、評価方法についてフローチャートで示し、実用的な評価を可能とした。職業リハビリテーションにおいては国際会議でコアセットが決定された。特別支援教育においては、18歳未満を対象にICFの初の派生分類として2007年に発表されたICF-CY（ICF-Children & Youth Version 国際生活機能分類・児童版）が活用されている。介護保険分野では、介護支援専門員基本テキストや2001年の指導者研修会において採用され、2003年には通所リハビリテーションの介護報酬の算定条件である計画作成において用いられた。2008年の制度改正では、ケアプランの立案に導入された。このように、各領域によってICFの活用状況に差がみられるのが現状であるが、着実に活用範囲は拡大しており、今後も拡大することが予想される。

3. 関連職種連携教育（IPE）におけるICFの活用状況

筆者の所属する大学は、IPEのカリキュラムにおいて、講義・演習・実習にわたり一貫してICFを活用した教育が行われている。看護・PT・OT・ST・視機能・放射線・福祉・経営・薬学の全学科が参加する。2年次全学生必修の講義「関連職種連携論」で使用するテキストでICFが共通言語として解説されている。3年次全学生履修の演習「関連職種連携ワーク」で使用する演習シートはICFに基づいて作成されている。4年次に病院・施設で行われる「関連職種連携実習」における総合サービス計画作成においては、アセスメン

トシートに、ICF が取り入れられている。
平成 24 年度関連職種連携実習を行った学生 133 名に対し、実習後に臨床教育委員会が実施したアンケート結果によると、「実習以前に ICF について学ぶ機会が十分にあった」の項目では、「全くそう思う」26%、「そう思う」35%、「どちらともいえない」23%、「そう思わない」10%、「全くそう思わない」7%と答えている。「ICF の理解が深まった」の項目では、「全くそう思う」31%、「そう思う」40%、「どちらともいえない」19%、「そう思わない」6%、「全くそう思わない」3%と答えている。他の 29 項目と比較すると、ICF に関する 2 項目では「どちらともいえない」を含めた否定的な意見の割合が多く見られている。ICF に関する回答のこのようなばらつきは、学科の養成課程における ICF の活用状況の違いが表れていると考察されている。

4. 考察

IPE における ICF の活用について社会福祉士養成の立場から考察する。関連職種連携実習後のアンケート調査では学科別の分析はなされていないが、社会福祉学生は、保健・リハビリテーション分野に比べ ICF 活用に関する理解が低いことが推測される。これは、臨床現場における ICF 活用について領域による差が見られることや、養成教育課程、特に演習において ICF の活用が十分に組み込まれていないことから推測される。

臨床現場を想定したチームアプローチを実践的に学ぶ IPE においては、臨床で広く用いられてる共通言語である ICF の活用は必要不可欠であると考えられる。ICF の活用により、対象に関する多様な要素、要因を理解し、自他職種の役割を認識することは、社会福祉士の業務内容である連絡調整、連携に結びつくものである。

社会福祉士養成課程では 2009 年の新カリキュラム施行により新たに「保健医療サービス」が指定科目に加えられたが、講義や相談援助演習で関連職種連携を習得するには限界がある。今後チームのなかで専門性を発揮し、調整役となるために

は、IPE はこれにふさわしい教育システムである。そこでは ICF の理解が前提となるため、演習等において実践的に ICF を活用するなど、今後は積極的に取り入れることが求められる。

佐藤は、ノーマライゼーション、ユニバーサルデザイン、機会均等化、差別禁止と権利擁護、地域で普通に暮らす、社会参加など、近年の理念の発展は、取り組みの焦点が本人を変えることから、環境を変えることへと向いてきていることより、病気や障害への取り組みと同時に、環境を変える取り組みがより重要となっていると述べている。ICF を活用することにより、チームにおける社会福祉士の役割を明確にし、「参加」「環境」への働きかけが期待されていることを自覚する助けになると考える。

関連職種連携教育の達成度と ICF の活用についての関連を示すことも求められ、さらなる調査が必要である。今後は、IPE に臨む社会福祉学生を対象にした調査をおこない、ICF の理解度、連携のために ICF をどの程度活用できたか、活用の意義についてどう考えるかについて分析し、社会福祉士養成課程に生かす必要がある。ICF によって、対象者の理解がどのように深まったのかを明らかにしていきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 障害者福祉研究会編：ICF 国際生活機能分類—国際障害分類改定版 中央法規出版 2002. 8
- 2) 北島政樹 総編集：医療福祉をつなぐ関連職種連携—講義と実習にもとづく学習のすべて 南江堂 2013.4
- 3) 山内和志 及川恵美子：国際生活機能分類（ICF）の現況と問題点 国際動向 総合リハ 37 -3 193-195 2009. 3
- 4) 大川弥生：当事者と専門家との共通言語としての I C F —リハビリテーション医療と介護における活用—ノーマライゼーション 22-251 2002.6
- 5) 厚生労働省：「活動と参加の基準（暫定案）」2007
- 6) 鈴木良子：ICF 職業リハビリテーションコアセットプロジェクト国際会議参加報告 職業リハビリ

テーション 24-1 65-68 2010

- 7) 国立特別支援教育総合研究所、WHO 編：ICF 活用の試み - 障害のある子どもの支援を中心に ジェアーズ教育新社 2005. 4
- 8) 平成 24 年度国際医療福祉大学関連職種連携実習報告書 2013.3
- 9) 高橋きのみ、橋本光康、加藤尚子 他（臨床教育委員会）： 国際医療福祉大学におけるチームケア教育－「関連職種連携実習」実践 第 5 回日本保健医療福祉連携教育学会学術大会 2012. 10
- 10) 社会福祉士及び介護福祉士法施行規則等の一部を改正する省令 2009.4.1
- 11) 佐藤久夫：「環境因子」とその活用 ノーマライゼーション 22-251 2002.6